

オノマトペの意味縮小

——「わくわく」を例に——

中 里 理 子*

(平成十五年十月三十一日受付)
(平成十五年十二月五日受理)

要 旨

「わくわく」を取り上げ、類義関係にあるオノマトペと、プラス・マイナスという意味の評価性の二点からオノマトペの意味縮小について考察した。「わくわく」は、現代語においては①期待・喜びなどのプラスの感情、②将来の出来事に対する感情という意味特徴を持つが、明治・大正期には①プラス・マイナス・中立的な感情、②過去から現在、将来にいたる出来事全般に抱く感情という、現代語より広い意味領域を持っていた。現代語のように意味が縮小された背景には、①類義語「どきどき」との関連により意味を限定したこと、②マイナスの感情を表すオノマトペが多いことによりプラス方向へ意味が傾いていったこと、③身体的意味を「わなわな」に譲り「わなわな」とは異なるプラスの方向の精神的意味に限定したこと、が考えられる。

KEY WORDS

オノマトペ Onomatopoeia 意味縮小 Reduction of the Meaning 類義語 Synonym
擬情語 Emotional Onomatopoeia プラス・マイナス・中立的 Positive・Negative・Neutral

はじめに

オノマトペは言語音と意味内容の結びつきに必然性が感じられる点で一般語彙とは区別されるもので、一度定着した意味が変化することは考えにくい。しかし、実際は長い年月を経て意味変化するオノマトペは少なくない。言葉の意味変化には拡大、縮小、

交替の三つの型があるとされているが、オノマトペにもその三つの型が当てはまると考えられる。筆者はこれまでに、いくつかの意味が派生して意味拡張した後、時を経て意味縮小を起こした「まじまじ」の例、類義関係にあるオノマトペや類似した語形のオノマトペとの関連から意味縮小を起こした「うっとり」「うっ

* 言語系教育講座

かり」の例から、オノマトベの意味変化のありかたを具体的に考察してきた。²⁾それらはいずれも多義であったものが意味縮小を起こした例であったが、今回は「わくわく」を取り上げ、一義であるオノマトベがさらにその範囲で意味を縮小させた例を考察したい。明治、大正期の小説を中心に「わくわく」の用例を収集し、³⁾現代語とは違う意味領域を持つていたことを確認し、そこから現代語のような意味へと意味領域が縮小されていく要因を考察する。

一 「わくわく」の意味変化

明治時代の作品には、次の例のように「わくわく」が現代とは違う文脈で用いられている例が見られる。

小萬も何とも云ひ得ないで、西宮の後に垂頭うつむいて居る吉里を見ると、胸がわくくとして来て、涙を溢こぼさずには居られなかつた。
(廣津柳浪「今戸心中」明治二九年)

別れの場面で右のように使われた「わくわく」は、現代語の感覚では違和感があるが、当時においては一般的な用いられ方であったようである。なぜ現代の言語感覚からは違和感が生じるのか、明治から現代に至るまでにどのような意味変化が生じたと考えられるのかを検討したい。そこで、まず現代語の「わくわく」の意味を確認し、次に明治・大正期の「わくわく」の意味を用例から分析して、「わくわく」の意味変化の背景を見ていく。

一 「わくわく」の現代の意味

角川小辞典『擬音語・擬態語辞典』³⁾の「わくわく」の項には

期待、喜び、楽しみなどで、気持ちわきたって落ち着かないようにす。

という意味記述がされている。用例として次の4例が挙げられている。

- ▼長年あこがれていた人に会えるかと思うと、期待とうれしさで胸がわくわくする。
- ▼合格の発表をわくわくしながら待っていた。
- ▼もうすぐ夏休みだと思うと胸がわくわくする。
- ▼わくわくと胸をおどらせながら、子供たちはクリスマスのプレゼントを開けにかかる。

これらの用例を見ると、「わくわく」は、「長年あこがれていた人に会えるかと思うと」「合格発表を待っていた」「もうすぐ夏休み」「プレゼントを開けにかかる」という表現に表れているように、これから起こる事態、将来の出来事に対して、「期待とうれしさ」「胸をおどらせ」など、その事態・出来事を喜んで待ち望む気持ちを表している。現代語における「わくわく」は

(1) 期待・喜び・楽しみといったプラスの感情を表す。

(2) これから訪れる事態に対して抱く気持ちを表す。
という二点を満たす意味であることが整理できる。この二点を念頭に置き、明治・大正期にはどのような意味特徴を持つのかを次項で見ていきたい。

一―二 「わくわく」の明治・大正期の意味

明治・大正期に見られた「わくわく」の用例を挙げ、そこから当時の意味を考えていきたい。

① 彼は忌々しそうにかつ刃を以て心部を突き通される苦しさを忍んだかと思ふような容子でわくわくする胸から声を絞っていた。
(土・明四三)

② 怖いやうな、悲いやうな氣持がして、逐出されたらば、實家の嫂さんが、何な顔をなさう、其れもつらし、と狭い胸一杯になれば、氣もわくわく。
(ありのすさび・明二八)

③ 自分は少し逆上していたのでそんな事はよく注意していられた。 (中略・筆者) 「此処でこの位じゃ、和歌の浦はさぞ大変でしょうね」と嫂が始めて和歌の浦の事を云い出した。自分は胸がまたわくわくした。
(行人・明四五―大二)

①②③はいずれも苦しみ、つらさ、心配、不安といったマイナスの感情を表している。現代語ではプラスの感情に限定されるため、その点でまず違和感を感じる。これから訪れる事態に対して抱く感情かどうかという点では、①はその時その場面で起きた出来事に対する感情を、②は現在の怖さに加えて追い出された場合のつらい状況を考へて落ち着かない氣持ちを、③は現在起こっている事柄を思つて抱く不安な感情を表しており、②のようにこれからの事態に対する不安感を表す場合もあれば、①③のように現在の出来事に対する不安感を表す場合もある。

④ あ、阿父は何處に何して居るだア。と見なさる通りの私ア二才だ。馴れねえ事で只わくわくするより外にはねえだ。
(観音岩・明三六)

⑤ 既に答書を送つたらうか、其とも未だであらうかと、阿光は胸がわくわくする様で
(名物松原饅頭・明三七)

⑥ 全体この話はどうなるだらうと、いろいろな考へやら空想やらが、僕のあたまに押し寄せて来て、たゞわくわくするばかりで心が落ちつかなかつた。
(耽溺・明四二)

④はプラス・マイナスの感情という点では、「馴れないので落ち着かないようす」という中立的な意味で使われている例である。⑤・⑥は④に比べると「落ち着かない氣持ち」が「心配・不安」寄りになってはいるが、先の①②③のような強い不安感というよりは、どうなのかわからず落ち着かないという心の動揺そのものを表しているようである。これからの事態に対しての感情、という点では、④⑤は過去から現在に及ぶ出来事に関して落ち着かない心の状態を表し、⑥はこれからの出来事に対する感情を表している。

⑦ 胸のわくわくするやうな年の暮の面白かつた事を想出して
あた。
(二十四五・明四二―四三)

⑧ はい今行ますと大きく言ひて、その声信如に聞えしを耻かしく、胸はわくわくと上氣して
(にこりえ・明二九)

⑨ あれ、御免なされまし、と桃色絹の手中にて濡れたる膝を密と拭はれ、胸は彌々悸々、顔は飲まぬに酔へるが如くなり
(亀甲鶴・明二九)

⑩ 而して自分も愈よ東京の書生生活に入るのだと思ふと、胸

のみワクくする。

(ぐうたら女・明四一)

⑦⑩は、喜び・嬉しさなどプラスの感情を表す例である。⑦は過去の出来事に対する感情を、⑧・⑨はその時その場での出来事に対する感情を表しており、プラスの感情という点で現代語と重なっていても、どの時点の出来事に対する感情かという点では異なっている。これらに対し、⑩は現代語と同様にこれから訪れる出来事に対する期待感を表している。

以上の①⑩の中では、⑩だけが現代語の意味に当たる用例であったが、大正期においても現代語とは異なる意味の用例が見られる。

⑪ 自分のことよりも、運転手や助手に対する気兼で、一秒ずつに、わくわくと胸さきへ苦しさが来た。

(多情仏心・大十一)

⑫ 親しい人達は別れの切なさに心がわくわくして碌に口もきかず

(或る女・大八)

⑬ 私も静かな物蔭を選んで、数学の公式を一通り見直した。大抵覚えていたようだが、何だかわくわくして胸に収まらないようでもあった。

(受験生の手記・大七)

⑭ ある終局を待受けるにも等しい胸のわくわくする心地で、捨吉は徐々と自分の方へ近づいて来る俣の音を聞いた。

(桜の実の熟する時・大三一七)

⑮ 青舎は、其が恋だらうね君に其芽生が出たんだねとわくわくした。

(無限抱擁・大十一十三)

⑯ 新しい仕事の興味が彼の小さい心臓をわくわくさせていた。

(あらくれ・大四)

⑪は過去から現在に及ぶ事柄に対して抱く苦しい思いを、⑫は現在の出来事からやがて訪れる別れに対する切なさを表しており、どちらもマイナスの感情になっている。⑬はその時点の自分の落ち着かない心理を、⑭はこれから訪れる事柄に対する胸騒ぎを表しており、どちらもプラスにもマイナスにも大きくは偏らない動揺した気持ちを表している。⑮はその時点での喜びあるいはこれからへの期待を、⑯はこれから訪れる出来事への期待感を表しており、どちらもプラスの感情である。大正期にも、「わくわく」はプラスの感情のみならず、マイナス、中立的感情にも用いられており、また、これから訪れる事態に限らず、過去から現在に及ぶ出来事に対する感情にも用いられている。一一で確認した現代語の「わくわく」の意味特徴二点は、大正期においても定着していないことが窺える。明治・大正期の「わくわく」は

(1) プラス・マイナス・中立的な心の動揺全般を表す。

(2) 過去から現在に及ぶ出来事や将来の出来事に対して抱く感情を表す。

という意味特徴を持っていたと整理できる。プラスの感情に限定されない点、将来の出来事に対する感情に限定されない点で、現代語よりも意味領域が広がったことが確認できる。

一一三 「わくわく」の身体性

明治期には「わくわく」が感情を表す以外の意味で使われている例がある。

⑰ ピストル！と心が叫んだ刹那、心臓はどきどきとして、耳は早鐘を叩くやうに鳴って、体が、わくわくと震へ始めた。

(物言はぬ顔・明四四)

⑬ 基は最う直ぐ唇の色まで失つて、道具を包む手がワクワクと顫える。(父母の家・明四二)

⑭ は体全体が、⑮ は手が「震える」様子を表している。「わくわく」のように心の動揺を表す際に使われるオノマトベに「どきどき」があるが、「どきどき」が⑰の例にも見られるように心臓の鼓動を表す場合に限定されるのに対して、「わくわく」は「震える」こと全般を指していたようである。

⑱ ⑲の例で「わくわく」は「震える」という行為自体を表しているのだが、その文脈に合わせて震えている時の精神的状況までも想起させる。次の例を見ると、全身のふるえとその状況下で抱く感情が結びついていることが窺える。

⑲ お勝は手も戦へ足も顫へ、全身の血が脳に上つて、胸が唯わくわくするばかりである。(淺瀬の波・明二九)

⑳ は手足が震え頭に血が上り、興奮した心の動揺を「胸がわくわくする」と表している。「わくわく」は今までの例にも見るように「胸がわくわく」など「胸・気・心・心臓」といった語と共に使われる例がほとんどである。「わくわく」とは、動揺して全身が震えるように感じられるほど、胸が騒いで落ち着かないようすを表していたと考えられる。現代語以上に身体的感覚に結びついていたように思われる。

㉑ 寒さにワクワク戦きながら(涼炎・明三五)

㉒ は、感情的要素が入らない状況で使われている例であり、

「わくわく」が身体的感覚を表すことをうかがわせる。ただし、明治期にはすでに次のように「わなわなふるえる」という震えを表すオノマトベ「わなわな」が一般化していたため、「わくわく」と「わなわな」という音の関連性で使用されたとも考えられる。

㉓ 顧みねどもその人と思ふに、わなわなと慄へて顔の色も変わるべく(たけくらべ・明二八―九)

「わなわな」は「手・唇・背中」等身体の一部や体全体が震えることを表すオノマトベとして広く使われていた。

また、明治期のもので調査範囲では一例だけ人間以外のものに「わくわく」が使われている例があった。

㉔ 砲兵工廠の高い烟突から代赭色をした汚い烟がわくわくと立上つて(煤煙・明四二)

煙がわき上がる様子を表しているので、「湧く」という語からの連想で使われたか、あるいは「むくむく」という、ふくれあがるようにものがわくことを表すオノマトベとの音の連想で使われたかのいずれかであろうか。「むくむく」は昭和の例だが次のように感情が湧く様子にも用いられるオノマトベである。

㉕ 感情がゴム管のようにむくむくともりあがつてきた。(空想部落・昭十一)

先の㉔の場合は人間の感情や身体的感覚ではないのだが、内側

から突き上げるように何か湧き出す、というイメージを持つ点では、これまでに見てきた「わくわく」と共通する点があると言えるだろう。

ここで見た「わなわな」「むくむく」には「わくわく」との音の関連性があると思われるが、「わくわく」が意味領域を縮小する点で関わりがあると思われるオノマトベを次に見ていく。

二 「わくわく」の周辺にあるオノマトベ

まず、現代語においても「わくわく」と類義関係にある「どきどき」と「うきうき」を取り上げ、明治・大正期における意味を見ていく。次に感情を表すオノマトベ（擬情語）^⑤について広く見ていき、「わくわく」が意味変化を起こす手がかりを考えたい。

二一 明治・大正期の「どきどき」

「どきどき」は心が動揺した際に使われるオノマトベである点で、「わくわく」と近い意味を持つ。先に見た「わくわく」の用例は、現代語の感覚からはほとんどの例が「どきどき」というオノマトベに置き換えられる。たとえば⑤は、

既に答書を送つたらうか、其とも未だであらうかと、阿光は胸がどきどきとする様で

となつていても違和感がない。そこでまず当時の「どきどき」の使用例方を用例から見てみたい。

- ②④ 「どうです、鴨緑江大捷の前触れだ、うれしかつたねえ、あの時分は、胸がどきどきしたものだ。」(号外・明三九)
- ②⑤ 只むしやうと嬉しくて胸が徒らにどきどきするのを覚え

た。
(田舎医師の子・大三)

- ②⑥ 「おれはそんなに弱くないぞ！」と口のうちで叫んだ。すると顔が熱つて、胸がどきどき鳴つた。

- ②⑦ 机に坐つてそわ立つ心を鎮めていると鐘が鳴り響いた。私の心臓は再びどきどき打ち始めた。
(物言はぬ顔・明四四)

- ②⑧ 「兄さん、びつくりして。御免なさいよ。」「まだ胸がどきどきしてゐるぢやないか。
(腕くらべ・大六)

- ②⑨ 小さいときから人の喧嘩をするのを見て胸がドキドキした位だよ。
(出家とその弟子・大五)

②④⑤は嬉しさ・喜びに高揚するプラスの感情を、②⑥⑦⑧は興奮・緊張・驚きといったプラス・マイナスに偏らない中立的な感情を、②⑨は不安・心配というマイナスの感情を表している。将来の出来事かどうかという点では、②④のようにこれから起こる事態に対する期待感を含む例もあれば、②⑥のように叫んだ結果引き起こされた感情、その時点の出来事に対する感情というものもある。これらのことから、意味上大きく「心の動揺」を表す点で、明治・大正期には「わくわく」と「どきどき」は類義関係にあることがわかる。また「胸がどきどきする」という表現が多いように、「胸・心臓」など共起語句を見ても「わくわく」と「どきどき」は同様の使用例方をしている。

- ②⑩ 「どきどき」は江戸時代の作品をいくつか見た中にも用例が見られた。
- ②⑩ わちきやあ最、知れめへかと思つて胸がどきどきして

③1 あはばどふしてこふしてと、胸はどきどきとけしなき
 (春色梅児誉美・一八三二―一三)
 (伊達競阿国戯場・一七七九)

③2 此御殿の結構に、目移りがしてどきどきする
 (修紫田舎源氏・一八二九―四二)

③0 は不安・心配というマイナスの感情、③1 はこれから起こることへの期待というプラスの感情、③2 は緊張感という中立的な感情を表しており、明治・大正期および現代語の意味と変わるところはない。江戸期の作品は古典文学データベースも使用して主な作品は調査したのだが、その範囲内で「どきどき」が五例みつかったのに対して、「わくわく」は一例も見られなかった。一方、明治・大正期になると、調査範囲内では「どきどき」より「わくわく」の用例のほうが多く見られた。明治・大正期には心の動揺を表す際に「どきどき」より「わくわく」のほうが用いられやすかった、と考えることができる。

「わくわく」と「どきどき」の違いは、身体感覚の違いに通じている。現代語でもそうであるが「どきどき」は心臓の鼓動を基本的に表しており、そこから心臓が激しく鼓動を打つような心の動揺が起きる状態を表している。それに対して「わくわく」は、もとは体の震えを表すところから来ているようであるが、体全体(あるいは手足などの一部)が震えるような動揺の様子、胸が騒いで落ち着いていられない様子を表していた。それが次第に「わくわく」の意味が縮小されていくのと平行して「どきどき」が用いられるようになったのではないかと思われる。調査範囲内では大正期になると明治期より「どきどき」の用例が多く見られた。「どきどき」は古くから意味変化を起さずに現代まで使われて

いる語であり、また次の例のように「どきり」という隣接する型も用いられていた。

③3 この灯を見附けた時は、嬉しくつて胸がどきりと飛び上がった。
 (坑夫・明四一)

「どきどき」は③3のような「どきり」の他、語基「どき」から派生した「どきつ」「どきん」「どつきり」などいくつかの型を持つオノマトペである。これに対して「わくわく」は「わくつ」「わつくり」などの他の型が派生していない。「どきどき」は心臓が激しく鼓動を打つ状況一般を、さまざまな型で広く表してきたのであろう。

二二 明治・大正期の「うきうき」

「うきうき」は『擬音語・擬態語辞典』⁽⁷⁾には「うれしさ、楽しさ、期待などで愉快になり、気持ちが悪く落ち着かないようす。」と説明されており、嬉しさ・期待などプラスの感情によつて落ち着かない気分を表す点で、「わくわく」と類義関係にある。まず明治・大正期の「うきうき」の用例からその意味を確認しておく。

③4 で、何となく気が浮々として、微笑の其類に上るのを禁じ得なかつた。
 (名物松原饅頭・明三七)

③5 胸騒ぎのしながらも浮々として、怖い淋しい中にも華やかな思ひが湧立つたが
 (泥人形・明四四)

③6 善鸞 (急に浮き浮きする) 今お前を身受けする事を考えていたのだ。
 (出家とその弟子・大五)

③7 漁夫達や、女でめん(女労働者)や、海産物の仲買と云つ

たような人々が賑かに浮き浮きして行ったり来たりしている。
 (生れ出づる悩み・大七)

③④⑤はいずれも嬉しさ、喜びに心が浮き立つようなプラスの感情を表している。何かの出来事があつてそれによつて嬉しくなる気持ち、将来起こる出来事を楽しみにする気持ち、双方に用いられ、「どきどき」と同様に、現代語と同じ意味で使われていた。明治・大正期にすでにプラスの感情に限定している点で当時の「わくわく」とは異なっていた。また、プラスの感情を表す場合でも、「わくわく」が湧き上がるような強い感情を表し得たのに対し、「うきうき」は「気・気分・心持ち」などの語とともに使われ、浮かれるような楽しく華やかな気分を表している点に違いが見られる。

「うきうき」は江戸時代にも用例が見られた。

③④ 気は浮きくとあそばして

(修紫田舎源氏・一八二九～四二)

「浮く」「浮かれる」という語の連想がそのまま語の意味になつている。「うきうき」も「どきどき」と同様に古くから意味変化を起ささずに使われ続けている語であることがわかる。

二二三 プラス・マイナスの擬情語

「わくわく」の意味変化の大きな点の一つが、プラス・マイナス両方の感情を表していたものからプラスの感情に限定されるようになった、ということである。プラス・マイナスという観点から現代語における感情を表すオノマトベ(擬情語)を見てみた

い。「擬音語・擬態語辞典」に「擬情語」に分類されているものの中から主なものを取り出し、プラス・マイナスに分けてみると次のようになる。

〈プラス〉

喜び：うきうき／いそいそ／ほくほく

期待：わくわく

心地よさ：うっとり

さわやか：すっきり／さばさば

〈マイナス〉

怒り：いらいら／むつと／むしゃくしゃ／むかむか／かつか

消沈：がっかり／がつくり

嫌悪：うんざり／げんなり

心配：くよくよ／はらはら／やきもき／ひやひや

驚きと恐れ：ぎよっ／びくっ／びくびく

ためらい：いじいじ／うじうじ／おずおず

〈中立的〉

驚き：はっと／どきと

深い感情：ひしと／しんみり

落ち着きのなさ：うずうず／むずむず

この他、「うかうか」「おちおち」などいくつかの語があるが、多くはマイナスのものである。また、「どきどき」は「擬音語・擬態語辞典」では擬情語に分類されていないので加えなかった。右の分類に見るように、主なオノマトベを拾っただけでもプラスの感情を表すものよりマイナスのものの方がはるかに多いことがわかる。

山口仲美氏は二〇〇二年と三〇年前のオノマトペを比較して「三〇年前のものは、『ガクリ』などの落胆気分を表わす語が多く、楽しくて明るい気持を写す語に乏しいことに気づき」、それに対して「現在だけに見られる語は、楽しいものが少なくない。」と指摘している。時代の流れとともに、感情のプラス・マイナスを表すオノマトペに変化があるようである。

明治・大正期の作品を見ると、先のマイナスのオノマトペに分類した「いらいら／はらはら」が数多く見られた。他に「くよくよ／さくさく／むかむか／がっかり」なども見られ、いずれも現代語と同様の意味で使われていた。このように多くのオノマトペがプラス・マイナスの意味変化を起こさずに使われ続けている中で、「わくわく」がプラスの意味に限定され、意味を縮小させたことの要因を、「どきどき」「うきうき」など周辺の語と関連させながら次項で考えていきたい。

三 「わくわく」の意味縮小

一・二項で見えてきたことを総合して、「わくわく」が明治・大正期から現代語の意味に意味領域を縮小したことの要因を考察する。

『擬音語・擬態語辞典』の「わくわく」の項に「類義語」として「どきどき」は不安、恐怖などの場合にも用いられ、肉体的にも表れるが、「わくわく」は精神的にとらえられる。」と記述されている。ここから、「わくわく」の意味縮小は、(1)「どきどき」との関連、(2)プラス・マイナスの感情の偏り、(3)身体的意味の消失、という三点から捕らえることができる。

まず(1)「どきどき」との関連だが、「どきどき」は心臓の鼓

動を基本的意味に持ちながら、激しく鼓動する心的状態を広く表すことから、強い心の動揺を表す点では「わくわく」と重なる部分があった。「どきどき」は古くから見られ、「どきどき」と「どきり」など他の型も見られるなど一般的に使われている語であり、プラス・マイナスに偏らず幅広く使えるオノマトペであった。その点で当時の「わくわく」も同様だったのだが、似通った文脈で使われる二語は併存しがたく、「わくわく」が意味を多少変えていくことになったのではないだろうか。意味変化の方向は、(2)プラス・マイナスの感情(3)身体的意味との関連で決まっていたと思われる。

次に(2)プラス・マイナスの感情の偏りだが、明治・大正期においてもマイナスの感情を表す語の方が圧倒的に多く、「わくわく」はプラスの意味を補う方に使われたのではないだろうか。心の動揺を表す場合、心配・不安は「はらはら」「ひやひや」などが、怒りや憤りは「いらいら」「むかむか」「かっと」などが使われていた。すでに他の語があるために、「わくわく」がプラスの感情を表す方向に傾いていったと考えられる。

さらに(3)身体的意味の消失が挙げられる。第一項で見ただうに、「わくわく」は体の震えという身体的意味も表していたが、体の震えを表すオノマトペには他に「わなわな」があり、當時も広く使われていた。「わくわく」は身体的意味を「わなわな」に譲り、震えを起こすような精神的状态を専ら表していくようになったのであろう。また、「わなわな」は震えそのものを表すのだが、文脈から次のようにマイナスの感情を伴って使われるものが多い。

③⑨ 「父危篤直戻れ」だ。これを読むと、私はわなわなと震え

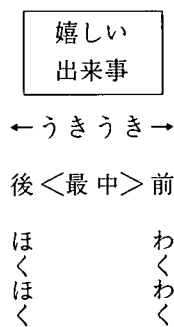
出した。

(平凡・明四〇)

このように「わなわな」がマイナス的な要素を含む一方で、「わくわく」はプラスの方向へ意味が限定されていったことも考えられる。

以上の三点から「わくわく」はプラスの感情を表すオノマトペに限定されていったと考えられるのだが、先に見たように「うきうき」もまたプラスの感情を表す語として古くから一般的に用いられていた。「うきうき」の意味との重なりはどのように解消されていったのかを考えてみたい。

「うきうき」は現代語でも「当選確実と聞いて、運動員の末端までうきうきとした表情です」(『擬音語・擬態語辞典』より)のように、当選確実と聞いた結果の喜び・嬉しさを表現する例があるが、これは「わくわく」と言いかえることはできない。「わくわく」は将来の出来事を待ち望む期待感に限定されている。喜びや嬉しさを表すオノマトペは他に「ほくほく」があるが、これは「思ったより客の入りがよく、ほくほくしている。」のように期待通りの結果を受けて感じる気持を表している。嬉しい出来事などの時点に対して感じる感情かという点で三語を関係づけると次のようになる。



嬉しい出来事の何が「うきうき」「わくわく」、出来事の最中が

「うきうき」、出来事の後が「うきうき」「ほくほく」となる。「うきうき」は時間的に広い範囲に使えるが、「わくわく」はその点で狭い範囲に限定されている。「うきうき」の意味が定着している中で「わくわく」の意味はこのように限定的に使われるようになったのではないだろうか。また、「うきうき」が浮き立つような軽い気分であるのに対し、「わくわく」は湧き上がるようなより強い感情を表す点でも違いがある。

おわりに

「わくわく」は昭和に入ってもマイナスの意味で使われた例がある。

④〇 急に頭の中がわくわくと口でも開いて呼吸でもするかのやうに、そしてそれに伴った重苦しい鈍痛が襲ってきた。

(業苦・昭三)

④① きれぎれの夢の中で彼はわくわくするような胸さわぎをおぼえ、何か人の気配をかんじたので(空想部落・昭十一)

しかし徐々に次のような現代語と等しい例が増えてくるようである。

④② 「もらってええかの?…」お父さんは子供のよにわくわくしている。

(放浪記・昭三)

今回はどの時点から現代語のような限定された意味に落ち着くのかを丹念にたどることはできなかったが、昭和一〇年代前半までマイナスの意味の用例が見られた。「わくわく」はもとから広い意味を持つ多義語ではなく、心の動揺を表す語として明治・大

正期には「どきどき」よりも多く用いられていた。しかし、周辺の「どきどき」「うきうき」「わなわな」といったオノマトペとの関係から意味を縮小させていったことが推測できた。オノマトペの意味変化の場合、類義語と意味領域を分け合っていく際に、プラス・マイナスという評価性が関係することがある。たとえば「ぼんやりする」という意味で重なっていた「うっとり」と「うっかり」は「うとうと」「うかうか」とそれぞれ関連しながら「うっとり」はプラスに「うっかり」はマイナスに意味が傾いていった。「わくわく」も、類義関係にある「どきどき」「うきうき」や身体感覚の点で重なる「わなわな」など周辺の語との関わりから、プラスの意味へと意味が限定されていった。現代語のオノマトペのいくつかが明治・大正期に意味変化を起こしている事も考え合わせて、今後もさまざまなオノマトペの意味変化について考えていきたい。

注

- (1) 国語学会編『国語学大辞典』（一九八〇 東京堂出版）「意味変化」の項（三五頁）。
- (2) 拙稿「オノマトペの多義性と意味変化―近世・近代の『まじまじ』を例に―」（『上越教育大学研究紀要』二二巻一号 二〇〇二）、「オノマトペの語義変化―明治期の『うっとり』『うっかり』を中心に―」（『文学・語学』一七六号 二〇〇三）。
- (3) 調査した作品はCD-ROM版「新潮 明治の文豪」「新潮 大正の文豪」「新潮文庫の一〇〇冊」（以上、新潮社）の他、「明治文学全集」（筑摩書房）「現代日本文学大系」（筑摩書房）所収の作品である。江戸期のものについては注6に示す。

- (4) 浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』（一九七八 角川書店）「わくわく」の項（三三九―三四〇頁）。
- (5) 浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』（一九七八 角川書店）に付された金田一春彦の「擬音語・擬態語概説」での用語による。
- (6) 江戸時代の作品は国文学研究資料館の古典文学データベースと、「滑稽和合人」「八笑人」「七偏人」「修紫田舎源氏」「近松半二・江戸作者 浄瑠璃集」を調査した。
- (7) 浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』（一九七八 角川書店）「うきうき」の項（三四頁）。
- (8) 『犬は「びよ」と鳴っていた』（二〇〇二 光文社新書）七一頁。
- (9) 注(2)に挙げた拙稿による。

参考文献

- 小野正広 一九八四 「『因果』と『果報』の語史―中立的意味のマインラス化とプラス化―」『国語学研究』二四号
一九八五 「中立的意味を持つ語の意味変化の方向について―『分限』を中心に―」『国語学』一四一集
一九八七 「『感情的意味』について」『国文鶴見』二二二号
寛壽雄・田守育啓編 一九九三 『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房
金田一春彦 一九七八 『擬音語・擬態語概説』『擬音語・擬態語辞典』所収 角川書店
西尾寅弥 一九九八 「言葉の意味に伴う評価性」『国語と国文学』七五巻六号
山口仲美 二〇〇二 『犬は「びよ」と鳴っていた』光文社

○明治・大正

明治・大正・昭和初期の「わくわく・どきどき・うきうき」
 「わくわく」は+・-・N・中立||Nを示した。

作品	品	わくわく	どきどき	うきうき
変目伝(柳浪)		N 1		
ありのすさび(宙外)		- 1		
にこりえ(二葉)		- 1		
われから(二葉)		- 1		
亀甲鶴(風葉)		+ 2		
今戸心中(柳浪)		- 1		
浅瀬の波(柳浪)		- 2		
忘れ得ぬ人々(独歩)		- 1		
鹿狩り(独歩)		+ 1		
八幡の狂女(柳浪)		- 1		
涼炎(風葉)		N 1		
春先(秋声)		- 1		
松原饅頭(柳浪)		N 2		1
観音岩(眉山)		N 1		
ゆふだすき(眉山)		N 1		
号外(独歩)		N 1		
其面影(四迷)			1	
ぐうたら女(風葉)			1	
春(藤村)		+ 1		
新所帯(秋声)		+ 1		
父母の家(青果)		- 1		
それから(漱石)		- 1		
娶(秋声)		N 1		1
耽溺(泡鳴)		+ 1		
煤煙(草平)		+ 1		
二十四五(秋声)		+ 1		
足迹(秋声)			2	
土(節)			2	
門(漱石)		- 1		
物言はぬ顔(未明)		N 1		
泥人形(白鳥)		N 1		
魯鈍な猫(未明)		- 1		
行人(漱石)		- 1		
桑の実(三重吉)			1	
田舎医師の子(泰三)				1

○昭和

作品	品	わくわく	どきどき	うきうき
雪後(梶井)		+ 1		
滝子其他(多喜二)		+ 1		
一九二八年二月一日(多喜二)		+ 1		
業苦(嘉村)		- 1		
更正記(春夫)		+ 2		
卍(潤一郎)		+ 1		
交尾(梶井)		+ 1		
空想部落(尾崎)		- 1		
麦死なず(洋二郎)		+ 1		
巴里祭(かの子)		+ 1		
旅愁(横光)		+ 3		
二閑人交遊図(上林)		+ 1		
明月記(上林)		+ 1		
あらくれ(秋声)		+ 1		
明暗(漱石)		N 2		
出家とその弟子(百三)		N 1		
桜の木の熟するとき(藤村)		N 1		
赤西蠣太(志賀)			1	
腕くらべ(荷風)			2	
受験生の手記(久米)		- 3		
生まれ出る悩み(有島)		N 1		
河の上の太陽(未明)			1	
お絹とその兄弟(春夫)			3	
小さな王国(潤一郎)			1	
流行感冒(志賀)			1	
長い恋仲(浩二)			1	
性に目覚める頃(犀星)			1	
ある女(有島)		- 5		
あの頃のこと(浩二)		+ 2		
人心(浩二)		N 1		
無限抱擁(瀧井)		- 1		
多情仏心(里見)		- 1		
第十一指の方向へ(田村)		N 1		
女賊扇綺譚(春夫)		+ 1		
COCUのなげき(田村)		+ 1		
伸子(宮本)		+ 1		
ある恋の話(菊池)			1	

Reduction of Meanings on Onomatopoeia —in the Case of “Wakuwaku”—

Michiko Nakazato*

ABSTRACT

I examined how meanings of onomatopoeia have reduced. An actual case of word “wakuwaku” has been analyzed its synonyms and emotional meanings. Today, “wakuwaku” means positive emotion for future happenings, but in the Meiji and Taisyo period it meant more widely and used for the expression of various kinds of felling when ones felt unsettled not only for future things but also for past things.

There were following three main factors on reduction of the meanings in “wakuwaku”.

- 1) “Wakuwaku” limited its meaning due to a synonym of “dokidoki”.
- 2) “Wakuwaku”’s tended to mean a positive emotion, because many other onomatopoeias exist for negative emotion.
- 3) “Wakuwaku” limited its usage for emotion, as contrasted with “wanawana” which limited to physical meaning.